24　　酒を断った上戸の境地　　　　　　　　　　文法　名詞・連体詞・接続詞・感動詞

読解 比喩の表す内容をつかむ

の主が、もと酒に更けるや、雪月花の興にもよらず、友ⓐあるにも飲み、友なきにも飲み、①はただ沖の石のかわく間もなき生涯なれば、ⓑある時の二字をれ与へしが、の秋重く㋐なやみてより後、いかなる時か来たりけん、飲まぬは飲むに勝り、酔はざるは酔ふよりも面白きものをと、三十余年の夢と覚めて、さしも世のそしり人のめも、に聞き捨てしをのこの、を破りを砕きて、もふとなりけるこそ目さむるなりけれ。ⓒこの人の痛飲せしほど、下戸は㋑さらなり、仲間さへつぶやきて、「かくては命も続くまじく、銭はやがて尽きなん」と、うたてきことに思ひし人々、②かつ驚きかつ賞して、これを賀してやまず。　　ⓓされば③枝柿の渋きより甘きに変はれる味は、・砂糖に勝れるを思へば、生まれながらの下戸にいや増して、始めの渋きにるべからず。ⓔさらば、その名の螯もて、今より左に餅を持し、右にを甘なひて、再び昔の酔郷には、頭をめぐらすべからずと、④舎螯の二字に改めて贈ることしかり。

* 語注

沖の石の～＝「わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなし」を踏まえた比喩。この元歌は「私の袖は涙で乾く暇もないのだ」という意味を歌った恋の歌。

左螯＝「螯」はのはさみ。左手で杯をあげる様子をえている。

辛巳＝ここでは一七六一年のこと。

蚊虻＝やのような小さな羽虫。

盞＝。

下戸・上戸＝下戸は酒が飲めない者、上戸は酒をよく飲む者。

【原文】

是非庵の主が、もと酒に更けるや、雪月花の興にもよらず、友あるにも飲み、友なきにも飲み、腸はただ沖の石のかわく間もなき生涯なれば、ある時左螯の二字を戯れ与へしが、辛巳の秋重くなやみてより後、いかなる時か来たりけん、飲まぬは飲むに勝り、酔はざるは酔ふよりも面白きものをと、三十余年の夢忽然と覚めて、さしも世のそしり人の諫めも、蚊虻に聞き捨てしをのこの、壺を破り盞を砕きて、雫も厭ふ下戸となりけるこそ目さむる業なりけれ。この人の痛飲せしほど、下戸はさらなり、上戸仲間さへつぶやきて、「かくては命も続くまじく、銭はやがて尽きなん」と、うたてきことに思ひし人々、かつ驚きかつ賞して、これを賀してやまず。されば枝柿の渋きより甘きに変はれる味は、蜜・砂糖に勝れるを思へば、生まれながらの下戸にいや増して、始めの渋きに反るべからず。さらば、その名の螯も舎て、今より左に餅を持し、右に煎茶を甘なひて、再び昔の酔郷には、頭をめぐらすべからずと、舎螯の二字に改めて贈ることしかり。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

酒浸りであった〔　　　　　　　　　　〕は「〔　　　　〕」の呼び名を贈られていたが、〔　　　　　　　　〕より酒を断った。仲間たちは〔　　　　〕、たたえて、新しい呼び名を贈った。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ（終止形でよい）。〈４点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ～ⓒの品詞を答えよ。また二重線部ⓓ・ⓔを現代語訳せよ。〈１点×５〉

ⓐ〔　　　　　　　　〕　ⓑ〔　　　　　　　　〕　ⓒ〔　　　　　　　　〕

ⓓ〔　　　　　　　　　　　〕　ⓔ〔　　　　　　　　　　　〕

問四　チェック問題［名詞・連体詞・接続詞・感動詞］

次の傍線部の接続詞の働きを選べ。〈１点×５〉

１　の花尾花の花また朝顔の花（万葉集）

２　つれづれなる夕暮れ、もしは、物哀れなるあけぼのなどやうに、…（源氏物語）

３　袋を解きて今宵の友とす。かつ、が発句あり。（奥の細道）

４　金ある竹を見つくること重なりぬ。かくてやうやう豊かになりゆく。（竹取物語）

５　船出ださずなりぬ。しかれどもに波風立たず。（土佐日記）

　ア　選択　　イ　添加　　ウ　並列　　エ　逆接　　オ　順接

１〔　　　〕　２〔　　　〕　３〔　　　〕　４〔　　　〕　５〔　　　〕

問五　傍線部①の表現の説明として最も適当なものを選べ。〈８点〉

ア　有名な古歌をとして用い、元歌の「涙」を「酒」に変えて、面白みを加えている。

イ　有名な古歌の本歌取りであり、元歌の「涙」の意味を踏まえ、酒にふける悲劇性を連想させている。

ウ　有名な古歌の引歌を用い、酒を飲んでいるばかりではない、主の教養の高さを強調している。

エ　有名な古歌の本歌取りを用い、主が酒を飲んでばかりで教養の低いことを印象づけている。

〔　　　〕

問六　傍線部②を現代語訳せよ。〈６点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問七　傍線部③はどのようなことをえた言葉か。三十字以内で答えよ。〈12点〉

〔

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問八　傍線部④に見られる、仲間たちの主への思いとして、最も適当なものを選べ。〈６点〉

ア　酒をやめたことを喜び、昔の状態に戻らないように願っている。

イ　酒をやめたことを信じ切れず、再び飲酒をしないよう諭している。

ウ　酒をやめてもどうせ長続きはしないと思い、からかっている。

エ　酒をやめてかえって体調を崩さないよう、優しく気遣っている。

〔　　　〕

【解答】

問一　是非庵の主／左螯／辛巳の秋／驚き

問二　㋐＝病気で苦しむ　㋑＝言うまでもない〈４点×２〉

問三　ⓐ＝動詞　ⓑ＝連体詞　ⓒ＝名詞（代名詞）

　　　ⓓ＝だから　ⓔ＝それならば〈１点×５〉

問四　１＝ウ　２＝ア　３＝イ　４＝オ　５＝エ〈１点×５〉

問五　ア〈８点〉

問六　一方では驚きもう一方では賞賛して、〈６点〉

問七　上戸仲間にまで命や生活を心配されるほど主が痛飲していたこと。（30字）〈12点〉

問八　ア〈6点〉

【現代語訳】

是非庵の主人が、かつて酒におぼれていたことといえば、雪月花の興趣も楽しまず、友がいる　 　　ときにも飲み、友がいない（とき）にも飲み、内臓はひたすら沖の石が乾く暇もない（ような）生涯なので、ある時左螯の二字（の号）をふざけて与えたが、辛巳の秋に重く病で苦しんでからというもの、どのような時が来たからなのだろうか、飲まない（こと）は飲む（こと）に勝り、酔わない（こと）は酔う（こと）よりもすばらしいものだなと、三十年余りの夢が急に覚めて、あれほど世間の非難や他人の忠告も、蚊や虻の羽音程度に聞き捨てた男が、（酒の）壺を割りさかずきを砕いて、雫も嫌う下戸となったことは目の覚めるほどすばらしい行いであることよ。この人が痛飲し（てい）た頃、下戸は言うまでもなく、上戸仲間すらつぶやいて、「このようにしていては命も続くはずがなく、銭はきっとすぐに尽きてしまうだろう」と、嘆かわしいことと思っ（てい）た人々が、一方では驚きもう一方では賞賛して、これを祝福してやまない。だから枝柿の渋いものから甘いものに変わった味は、蜜や砂糖に勝っている（ほど甘い）ことを考えると、生まれながらの下戸よりもいっそう、始めの渋い（味の柿のような）頃に戻ることはないだろう。それならば（と）、その名（号）の螯も捨て、これからは左手に甘い餅を持ち、右手に煎茶を持つのをよしとして、二度と昔の酔いの里（酔っていた頃）には、頭を向けてはいけないと、舎螯の二字に改めて（号を）贈ることこのとおりである。

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　現代語訳せよ。

①「いかなる時か来たりけむ」（３行目）

②「銭はやがて尽きなん」（７行目）

問２　「三十余年の夢」（４行目）とは、具体的にはどのようなことを指しているのか。最も適当なものを選べ。

ア　時節に関わらず、ただひたすらに酒を飲み続けていたこと。

イ　酒に酔った状態の方が興趣を感じると思い込んでいたこと。

ウ　自分が上戸であることに誇りを持って、飲み続けていたこと。

エ　友の忠告をありがたいと思いながら、聞かずにいたこと。

問３　「頭をめぐらすべからず」（10行目）とは具体的にはどのような忠告であるか。二十字以内で答えよ。

【補充問題解答】

問１

①どのような時が来たからなのだろうか

②銭はきっとすぐに尽きてしまうだろう

問２　ア

問３　二度と上戸に戻ってはいけないということ。（20字）